

昭和52年5月23日第3種郵便物認可 平成元年8月1日発行 毎月1回1日発行 通巻301号

かもしか



No. **301**
1989.8

第五回陸奥湾沿岸駅伝県下川柳大会

- ▽とき 九月十日(日) 午前十時
- ▽会場 野辺地町中央公民館
- ▽会費 二千元(昼食・発表誌含ま)
- ▽宿題と選者 各三句
- 「根」 蟹田 北野 岸柳 蟹田 北野 岸柳
- 「トンボ」 平内 沼山 久乃 三沢 佐々木 古川子
- 「巷」 川内 高田 寄生木 黒石 西谷 東山
- 「二人」 弘前 工藤 寿久 青森 三上 迷太郎
- 「星」 八戸 西山 金悦 野辺地 上野 しん一
- ▽席題 三題
- ▽アンカー吟 五分吟
- ▽大会方法 出席者を抽せんで数チームに分け、上位五句の合点による。
- ▽賞 優勝チームと個人二十位まで呈賞
- ▽事務局 野辺地町石神裏 上野方
- 主催 陸奥湾沿岸川柳懇話会
- 主幹 野辺地川柳社

川柳忌・瞭象句碑建立記念川柳大会

- ▽とき 九月二十三日(祭) 午前十時
- ▽会場 黒石公民館三階日本間
- ▽会費 三千元(懇親会費を含む)
- (運転者と女性は、二千元)
- ▽宿題と選者 各一句
- 「決心」 弘前 宮本 紗光
- 「割勘」 青森 三上 迷太郎
- 「気休め」 八戸 西山 金悦
- 「変動」 五所川原 菊池 ふみを
- 「燃える」 野辺地 上野 しん一
- 「矢印」 三戸 坂本 雨山
- ▽席題 三題共選 各一句
- 佐々木文字 船橋三郎 杉野草兵ほか
- ▽賞 宿席題合点二十位まで呈賞
- ▽瞭象杯 「ねぶた」 一句 工藤甲吉
- 鹿内馨晴 齊藤しげる 工藤寿久 佐藤遊子 共選 二位まで句入り楯呈
- ▽柳允杯 「義理」 一句 三浦宗一
- 波多野五楽庵 小野久樹 高田寄生木
- 杉山蝶子 共選 二位まで句入り楯呈
- 主催・黒石川柳社 共催・青森県川柳社

第七回川柳Z賞・大賞

(賞金十万元・句集・津軽塗桶)

神戸市 金山英子

ホロホロと母をこぼして四十の自愛
 のどのあたりのさくらつめたし母の紅
 日月流れて水に返すは母の面
 なにほどの雪やおすおす抱かれおり
 耳朶あつし昨日抱かれしことのほか
 ほつようや丸太コロリとその丸太
 たれかれに揺れるすすきの通い婚
 未練ばかりが逢いにくる雨 ざざざざり
 こんなちいさな 私になって小石になって
 わたくしの骨とかかわるさくらつば
 子を産みし むかしむかしのちぶさの雪よ
 ころぶ子をじっと見つめる狐つき
 不意に哀歌 子を叱りしは春の乱
 六ッ参りの風に日鼻の生々流転
 セツ参りの子もつたかたや万の灯

子と哭いた遠い炎天 いまも炎天
 子の髪の長けて十月積み残す
 返り血の子より見事なピアノ乱調
 霜柱サクリと我が子 私の子
 子を叱る涙を溜めに夜々の霜
 忘恩や我に子があり水の刑
 処女空聞 子に持たせては並木のまま
 父の忌の風は朝々夢見のはずれ
 棒倒しおしつづける昨日の涙
 彼岸ちかづく 手枷足枷風の柳
 風に手を引かれて戻る雑木の風
 木影花影 遠い怒りの無数の闇
 八月謹呈 地藏盆より戻らぬ闇
 ひとり斬る すべて裏切る鏡あそび
 すすきの花の華の鬼なる いっせいに

八月号もくじ

- 大賞 金山英子 一
- 準賞 石部 明 二
- 選評 柴田 午朗 一一
- 選評 杉野 草兵 一一
- 選評 時美 新子 一二
- 選評 寺尾 俊平 一三
- 選評 橋高 薫風 一四
- 選評 細川 不凍 一五
- 選評 大野 風柳 一六
- 選評 福島 真澄 一七
- 選評 片柳 哲郎 一八
- 選評 尾藤 三柳 一九



金山英子

北の角笛(102) 片岸てい一 二五
 人生いろいろ① 宮本めぐみ 三九
 ちばらき・しばらくの佐藤川太郎 四〇

選考のあとに

- 大賞 20 金山英子(兵庫)
- 準賞 17 石部 明(岡山)
- 秀逸 12 加藤 久子(宮城)
- 秀逸 11 大友 逸星(宮城)
- 秀逸 10 樋口 由紀子(兵庫)
- 佳作 9 野沢 省悟(青森)
- 佳作 7 佐藤 岳俊(岩手)
- 佳作 6 高橋 かつき(兵庫)
- 佳作 6 行本 みなみ(岡山)
- 佳作 4 万 迷多(岩手)
- 佳作 4 外山 あきら(福岡)
- 佳作 4 長町 一吠(岡山)
- 佳作 4 坂東 乃理子(兵庫)
- 佳作 4 山本 磔(京都)
- 佳作 4 村井 見也子(京都)
- 佳作 4 小玉 カヨ(北海道)
- 佳作 3 北村 泰章(高知)
- 佳作 3 山本 忠次郎(東京)
- 佳作 3 平 宗星(東京)
- 佳作 3 嘉瀬 信柳詩(北海道)
- 佳作 3 本多 洋子(大阪)

第七回川柳Z賞・準賞

(賞金一万円)

岡山県 石部 明

いちにちじゅう口動かしている影だ
 やわらかい掌で暗黒を弄ぶ
 わが影をばきばきと折り火にくべる
 月明に犯されてゆくわが手足
 青という一字のために殉死せむ
 物陰に父がしゃがんでいる月夜
 真暗に生家が口をあけて待つ
 晩年の股間に蝶を眠らせる
 たましいの裏もおもても明るく干す
 一列のみないっせいに舌をだす
 てのひらに生あたたかいいものが触れ
 分身とならざるままの冬の傘
 冬帽の中に真冬の貌が満つ
 円柱にかくれてわが名眩けり
 月光を浴び転がっている鈍器

かっとな目をひらいて月が昇ってくる
 病室にぼつんと落ちて眠る眼玉
 仏壇の空はからりと晴れている
 うつくしくなるまで鎌を研いでいる
 花かげにすこし熱の身をかくす
 手を振って狂院の窓覗れわたり
 くらがりたっている眼を泣きはらし
 やわらかに秋の植物囁んでおり
 うしろには漆黒の海舌をだす
 戦いの意志なき鳥をぶらさげる
 地下鉄の扉に影を貼ってくる
 酔いどれて月光浴びて樹を担ぎ
 声あげて月夜の杭を打っている
 死者の顔ばかりの賑やかなカルタ
 月光に歯抜きの貌を晒すなり

秀逸

岩沼市 加藤 久子

買袋一面冬の喜劇が咲いている
 枯野来るわたしの蒼い郵便夫
 冬困い言葉ひとつずつ喪くす
 くもり硝子のなかで重たくなる情
 いつもの角で言葉まみれの太郎の靴
 大根おろし春の幻視に耐えている
 人混みでゆっくりほぐす草書体
 元氣じるしの義眼と冬の旅をする
 夕映えの痛み左のポケットに
 自画像は歪になんにもなかった日
 陽炎を踏ぐ巨きな霊柩車
 うつつと指喰べ尽す雪一日
 ポケットに今日も溜ってくる餅
 次女横向きちりちり通る寒冷前線
 もしもしと闇の深さを尋ねている
 傘貸して少し安らぐ箱のなか
 ここは喜劇のまんなかあたり梅漬ける
 朝の音楽私の死後の上大気
 お祭り広場にわっと溢れる眼のない魚
 紙吹雪すんと沈んで考える

秀逸

仙台市 大友 逸星

飯門店に女が二人立っている
 西瓜割り深い絆と言ってみよ
 蠅が一匹飛んでいる 二匹いる
 無縁かな命をくべて暖まる
 忘れ物届けにきました 雫です
 脆いから家族揃って飯を食う
 人形の箱は途方もなく深い
 君の掌の水が溶けてから話す
 飯粒を集めて痛むものがある
 革命のそれは静かな雪の音
 一般参賀の列の集金人である
 天国のスリッパを履いて来ちゃったよ
 銅像と男は飯を作らない
 二等辺三角形の立ち眩み
 仲間にははぐれたこととしておこす
 粥腹の男に腹を切らせよう
 女関の大きな靴を見て帰る
 本当の乞食は門に入れてやる
 落語を聞いているのは時間のない夫婦
 引き出しで紐になったり蛇になったり

第一次選考

- 佳作 3 芳賀 弥市(宮城)
- 佳作 2 勝野 みちお(長野)
- 佳作 2 井上 信子(京都)
- 佳作 2 盛合 秋水(岩手)
- 佳作 2 情野 千里(兵庫)
- 佳作 2 佐藤 富久子(山形)
- 佳作 1 樋口 仁(三重)
- 佳作 1 須場 秋寿(三重)
- 佳作 1 岩崎 眞里子(青森)
- 佳作 1 久保田 美柳(兵庫)
- 佳作 1 市川 孝子(山梨)
- 佳作 1 西条 真紀(岡山)

★館岡 幸人 すいせん

- 行本みなみ 板東 弘子 市川 孝子
- 野沢 省悟 夏 礼子 黒沢かかし
- 山本忠次郎 村井見也子 牧野 孝子
- 加藤 正治 大友 逸星 久保田美柳
- 本田 洋子 吉田 浪 原 多佳子
- 鍋島 十歩 奥山 晴生 富谷 英雄
- 小玉 カヨ 川路 泰山 金山 英子
- 情野 千里 普川 素床 佐藤 富子

★西山 金悦 すいせん

- 高橋佐知子 山本 礫 菊地俊太郎
- 野本 君子 盛合 秋水 片島 康子
- 宗村 政己 松村 育子 井床 芦蘭
- 佐藤富久子 越川 知慧 野本 君子
- 盛合 秋水 樋口 仁 河瀬 芳子
- 富谷 英雄 岩崎眞里子 土屋 桜子
- 久保田美柳 桜田 京美 村井見也子
- 庄子 喜一 勝野みちお 野田 はつ
- 齊藤はる香 石部 明 金山 英子
- 本田 南柳 玉利三重子 佐藤 岳俊
- 行本みなみ 北村 泰章 大谷晋一郎
- 板東 弘子 市川 孝子 野沢 省悟

★工藤 寿久 すいせん

- 井床 芦蘭 山田 昇 荻原久美子
- 外山あきら 芳賀 弥市 佐藤富久子
- 盛合 秋水 岡崎 一也 鍋島 十歩
- 河瀬 芳子 尾田左桐子 岩崎眞里子
- 小玉 カヨ 猪狩 牧芳 奥山 晴生
- 土屋 桜子 嘉瀬信柳詩 原 多佳子
- 村井見也子 本多 洋子 山本ひさゑ
- 西条 真紀 石部 明 牧野 孝子
- 齊藤はる香 安立次弘道 金山 英子
- 須場 秋寿 万 迷多 板東 弘子

秀逸 姫路市 樋口 由紀子

真夜中にナイフ一本生み落とす
まなづらの花壇に埋める白い音楽
橋の上で眠ってしまふ雪だるま
口中に溶けない鉛を持っている
指輪はずすと一気に入脆くなる五感
掌を濡らす たぶん何にも起らない
転がるとたちまち金魚鉢の底
一斉にわたしを抱きに来る桜
春雷や鏡の位置を確かめる
蒼天の果てまで生臭い前歯
枕を干して失くした連を取り戻す
目のなかでだんだん高くなる積木
黙ることあり 耳朶が膨らむ
水に輝き水になろうとする蛍
月は明 薔薇など抱いて眠りたい
鉄棒でぐるぐる回ってからひとり
燃えるものみんな燃やして指を折る
鬼こっこ 水は両手で掴むもの
死体となる速さで坂を駆け下りる
魔女と同じ匂いをさせて髪を梳く

佳作 青森市 野沢 省悟

ひかり降る雪ふるわれの掌の砂丘
髪はさいはて春の雪より水を乞う
次の世の雪を見ているさくらさくら
からのちやわんに春雨みちてゆくをまつ
つまのみみ翡翠となつてもものはな
むらさきの椿をだててみたのだが
青をひとさじ含んでわが子一年生
つまをいだしし琥珀のよるのほしのおと
どこをかじると微笑ってくれるゆでたまご

佳作 岩手県 佐藤 岳俊

稲を刈る滅びゆく手と燃える藁
豊かなり廃田の背に雪積もる
やがて確かな田墳になる乳房ふたつ
いくたびの桐鳴田螺闇へ消え
呪文怒り雪の荒野をひたはしる
伝説の河床にならぶ仏たち
這いあがる湿田ピテカントロプスよ
石影に飯もりあげて首を垂れ
藁を打つ木槌の悲鳴冬の十間

佳作 西宮市 高橋かづき

恋やせん いつも美人でいるために
返事欲し ずっと後悔するような
恋すれば雪はひたすらわたくしに
気まぐれにくれるひりひりする手紙
愛は横書き告げたきこはただひとつ
欲しいものなんにもないという返事
さびしくて水道栓をしめすぎる
大人にはなりきれなくて髪飾り
綺麗だと言っておまじない

佳作 岡山市 行本みなみ

朝から雨 女はかりの葬が行く
午前中かかって指を喰べたる
裏山に両眼ありと誘う猫
蒼く青く燃ゆる絵本を購つてくる
手の届かかぎりの花を裏切らう
火のむかし 水のむかしよ 元は武士
約束で初夏には薄い血を流す
髪を剪る カラスの多い絵の中で
樹を打てば遠くに甘く死が呼ぶ日

佳作 宮古市 万 迷多

石ひとつ拾い遥かな冬を視る
打ち合った傷から未来初まりぬ
郷里のつぶてが父の遺品の中にある
花びらを巡る数多の風を見た
歳月よあれが風切り羽根だとは
生き水らえるなんと寂しき春だろっ
人を許した句読点なら打ち迷う
花散らす心を散らす木偶で候
無冠のスプーンで海を掬い続けている

佳作 大牟田市 外山あきら

ときどきは海に電話をかけている
記憶喪失がはじまっている父の斧
寒灯下 産んではならぬ子を宿す
川ひかるおんなが身一つになる
遅くなった理由 月とぶらんこしてました
おんなと別れすこし残尿感のある
ちち はは 健在玉葱が吊つてある
紙飛行機の返事待っているのだが
あれもこれも嘘だと思ふ耳そっじ

★須田尚美 すいせん

- 松村 育子 荻原久美子 普川 素床
- 芳賀 弥市 樋口 仁 菊地俊太郎
- 盛合 秋水 鍋島 十歩 桐越 千絵
- 本多 洋子 三浦 蓉 佐藤 美文
- 村井見也子 西条 真紀 斎藤はる香
- 金山 英子 石部 明 都築 裕孝
- 佐藤 岳俊 北村 泰章 須場 秋寿
- 阿野 文雄 樋口由紀子 情野 千里
- 山本忠次郎 加藤 久子 樋口 青樹
- 松本 春道 行本みなみ 浜本 美奈

★八坂俊生 すいせん

- 宗村 政己 坂東乃理子 松村 育子
 - 井上 信子 岩田 七筆 高橋かづき
 - 高橋佐知子 奥山 晴生 上野 天井
 - 加藤 正治 久保田美椰 万 迷多
 - 都築 裕孝 石部 明 村井見也子
 - 本田 南柳 玉利三重子 佐藤 岳俊
 - 樋口由紀子 北村 泰章 谷口 次男
 - 情野 千里 行本みなみ 松本 春道
 - 板東 弘子 夏 礼子 野沢 省悟
 - 黒川 清光 上島みゑ子 阿野 文雄
- ★渡辺和尾 すいせん
菊地俊太郎 樋口 仁 坂東乃理子

★田口麦彦 すいせん

- 山本忠次郎 宗村 政己 高橋佐知子
 - 越川 智慧 一ツ家智恵子 平 宗星
 - 板東乃理子 松田 京美 佐藤富久子
 - 佐藤 岳俊 高橋かづき 井上 真実
 - 岩崎眞里子 佐藤 幸子 小谷美つ千
 - 北村 泰章 村井見也子 野沢 省悟
 - 本田 南柳 三浦 蓉 外山あきら
 - 長町 一咲 岩瀬由希子 夏 礼子
 - 奥山 晴生 石部 明 上島みゑ子
 - 阿野 文雄 樋口由紀子 岩田 七筆
 - 名取久美子 情野 千里
- ★吉田成一 すいせん
井上 信子 石部 明 佐藤 岳俊
盛合 秋水 国武ナカ子 本多 洋子
加藤 正治 大友 逸星 石田 寿子
須場 秋寿 野沢 省悟 松村 育子
岩田 七筆 吉田 浪 伊東 マコ
西条 真紀 藤井比呂夢 宗村 政己

佳作 岡山市 長町 一吠

鶴も母も老いゆく禿る形して
妻と来て無言の目を揺り動かす
酒売り来たれば異形の母で掌を合点され
一念の極まりて散る一葉たり
母となにか蛾の泪を見ていたり
母の白骨きらきらきらとわが眼射る
納骨終る激しく幼き日にもどる
亡母を呼ばん 真夜の襖を開け放てり
なにごとくもなかつたように酒を売る

佳作 加古川市 坂東乃理子

死亡0事故1という日のわが家
お隣りの猫が土足でやってくる
長靴の中にさかなの水死体
努力した鈴虫だけが鈴の音
プールから出ると病気になるっていた
蜘蛛は巣をかける 私は巣をほらっ
病院で軽く二時間待たされる
無理をしてがんばっている寒げいこ
人の死ぬ部屋でストーブ燃えつつけ

佳作 京都市 山本 磔

老犬の貌に祈りはなかったか
盲点に縋ろう ころろを下さいと
風車よ 誰を探しているんだい
この人の火の出る顔が見たかった
ランクある街へだんだん出たがらぬ
転び方のむつかしさなら教えます
目のなかにナイフをもっているようだ
雑草になれよ群れから逃げるなよ
裏で手を結ぶ かなしいことだけだ

佳作 京都市 村井見也子

えんぴつを削る祈りがいつもある
おぼろ夜を内なる答に目を据えて
妻の名にあえてこだわらざる穂
ゆるやかに飢えがはじまる傘いっぽん
念すればこの手この身の風ぐるま
母方のうすい血を恋う針供養
生きて一日男どき女どきの軽はずみ
夕ぐれの焚火にむせる傷まみれ
水溜りすこし汚して逢いやすし

佳作 網走市 小玉 カヨ

りんごむくナイフの先から白い川
あなたの子ポロポロりと生んでゆく
寒の月あつくながめて妊りぬ
追えばまたケラケラ笑うバラの華
サンマ焼くサンマの涙であるわたし
サラダ少し盛って夢が太りだす
毒少し盛られてわたし人間に
ごめんなさいただ人肉を食っただけ
ほれやすい指でこねてる土だんご

佳作 高知市 北村 泰章

友の計へ日めくり一枚刺き残す
通夜から戻りおとぎ話の子と眠る
僕の骨汚物のように捨てられる
水甕に顔を映して病んでる
運のない手を太陽に見てもらおう
軋む椅子妻が祈ると風が止む
桜散る夢がこわれて行くように
果てのない旅だね妻よ眠ろうか
梅雨しどど夫婦も少しカビ臭し

佳作 東京都 山本忠次郎

平成のぼかんとしる昼の月
縄で括れころがっている昭和
地球儀のどこにも裏張りの戦史
山積みの昭和の品がどっと崩れ
平成の空抜けてゆく御霊かな
天皇の脳置き去りの日章旗
紫の波が鎮まる崩御なり
英霊の髪逆立ちて昭和果つ
何事もなかったように着流れ

佳作 東京都 平 宗星

火の川を渡るおんなの曲り角
わたくしを焼く指先の熱帯夜
帽子から肉欲の豆芽吹きます
ジーンズの蛍淋しい貌でいる
雪ダルマひとりの火夫という夜明け
冬の蝶 国境越えて人となる
この夜からあの世へ嫁ぐ綿帽子
手鏡の空に朱を染め母となる
潮騒をじっと聴いている白い壺

山本 余子 万 迷多 鍋島 十歩
片島 康子 木野由紀子 佐藤 幸子
阿野 文雄 中村 純江 庄子 喜一
加藤かずこ 夏 礼子 行本みなみ

★小 野 公 樹 すいせん

情野 千里 塩釜 篤 盛合 秋水
山本ひさる 加藤 久子 安平次弘道
松本 春道 斎藤はる香 中村 純江
加藤かずこ 長町 一吠 長崎たけ子
浜本 美奈 宮本めぐみ 松山 我楽
勝野みちお 山本 椋子 野沢 省悟
万 迷多 岩崎眞里子 市川 孝子
佐藤 幸子 樋口 仁 山本忠次郎
芳賀 弥市 黒沢かし 佐藤 岳俊

★高 田 寄生木 すいせん

宗村 政己 荻原久美子 土屋 椋子
本田 南柳 樋口 仁 国武ナカ子
宮本めぐみ 野田 はつ 金山 英子
原 多佳子 一ツ家智恵子 山本 磔
市川 孝子 山田 昇 上高み多子
平 宗星 藤井比呂夢 長町 一吠
大友 逸星 夏 礼子 嘉瀬信柳詩
桐越 千絵 板東 弘子 松山 我楽
石田 寿子 三浦 蓉 樋口 青樹

※二名以上被推薦の82名を第一次選考。

第二次選考

★葉 田 午 朗 すいせん

①金山 英子③北村 泰章⑤佐藤 岳俊
②万 迷多④外山あきら
★時 実 新子 すいせん
①樋口由紀子③石部 明⑤岩崎眞里子
②大友 逸星④芳賀 弥市
★寺 尾 俊 平 すいせん
①佐藤 岳俊③山本忠次郎⑤樋口 仁
②石部 明④長町 一吠
★橋 高 薫 風 すいせん
①高橋かづき③平 宗星⑤久保田美椰
②坂東乃理子④井上 信子

★細 川 不 凍 すいせん

①石部 明③野沢 省悟⑤外山あきら
②村井見也子④金山 英子

★大 野 風 柳 すいせん

①大友 逸星③嘉瀬信柳詩⑤須場 秋寿
②山本 磔④盛合 秋水

★福 島 真 澄 すいせん

①金山 英子②加藤 久子③野沢 省悟

佳作 札幌市 嘉瀬信柳詩

百の言葉は百の雪片 北に住む
溶けるとき炎を吐く雪片だつてある
傘がいっぱいこの安らぎは何だろつ
桜満開すこし狂つてみたくなる
すこし酔つて 風をつかましようとする
掌の汽車が発つ日すこし寒ゆるむ
茄子島さても陽気なおんなたち
水たまり僕の名前が落ちている
福耳のおんなに背後から撃たれ

佳作 松原市 本多 洋子

木馬昇天 春はことさら明るいのに
こわされそつな恋です 青い手紙です
花のブローチひとつ位で華やいで
パン屋が匂う少し人間らしくなる
蹄の音は胸の高鳴り 絹ハンカチ
垣根越に隣の日曜日が見える
コーヒーをどうぞ 五月のデスマスク
てにをはの判る金魚を飼っている
豆をむく 妻の無口は昨日から

佳作 京都市 井上 信子

マーチなら似合う帽子をもっている
四月馬鹿お喋り好きな糸電話
誘われた耳のムズムズまだ取れぬ
カゴメカゴメ遠くに置けばいい男
生命線の長い男から逃げよう
うどん屋のみんな他人の箸を割り
銀行の裏に人間臭い犬
青い雨五月の貨車を見失う
鍵束に一つ知らない鍵がある

佳作 宮古市 盛合 秋水

拘りや冬落日を瞳に刻む
冬蛭いのちの髪に棲んでいる
よされよされと雪の匂いのする女
愛の絵を幾枚描けば象になる
しがらみや捨ててに惜しい欠け茶碗
ゆっくり放尿うるこ一枚すつ光る
種袋の子はどんな色をもつ
もも割ればいのち一つがうずくまり
方程式通りに食べて飲んで寝る

佳作 仙台市 芳賀 弥市

一握の砂買いに行く蒼き父
あだし野や我に京の血筋なし
夜は陽気に私に逢いたがつている
水割りの水が動き男が動く
酔漢に妻あり朝の水を飲む
女と男軽い食事を繰り返す
一枚の海苔をあぶっている相克
豆も昆布も少し煮過ぎた冬の音
善玉悪玉少し疲れた私の血

佳作 大町市 勝野みちお

はぎききよう耳朶美しいのも罪な
青梨の青かきり病む 多恨
さよならをいつ書く花よ 梅雨もどろ
許されぬちぎり絵と踏む冬いばら
バラの朱に深入りしたか火を好る
ひめくりの一枚惜しいのも刑余
風はえにし また嘔む小指おんな指
八月の罪蟬たちは鳴くだけで
魂は売らぬ 汚れた雲もまた

佳作 姫路市 情野 千里

風に朱が混じつてころびやすい午後
少年を抱くばたばたと死ぬ月のうさぎ
ポイソプラノあふれて髪は生乾き
こは熱帯おとこの背の花を摘む
葡萄酒は酔になるジゴロの凝視
花の衣はダビデの像の裏で脱ぐ
少年がスプーンを落とす魔女の亀裂
河童の淵ですこし快樂に流される
ランニングシャツの白と三秒だけ沈む

佳作 鶴岡市 佐藤富久子

見合いする恋のつばみを手折りつつ
手袋に恋のぬくもり秘(かく)しおり
泣いてなお流しきれないあいを抱き
焼きすぎたトースト苦い愛しすぎて
命なき恋をしたままドライブフラワー
くすり指はずせぬ愛に縛られる
この恋の甘さを裂いて行くコーヒー
伝えてはならない思いに切手貼る
恋の球キャッチボールを誰とする

- ④長町 一吠⑤西条 真紀
★片 柳 哲 郎 すいせん

- ①金山 英子③野沢 省悟⑤市川 孝子
②石部 明④加藤 久子

- ★尾 藤 三 柳 すいせん

- ①加藤 久子③本多 洋子⑤大友 逸星
②樋口由紀子④情野 千里

- ★杉 野 草 兵 すいせん

- ①行本みなみ③勝野みちお⑤外山あきら
②児玉 かよ④佐藤富久子

水急不流月

金山 英子

寝耳に水の嬉しい報を受けたのは、六
月二十日、前回受賞者の桑野晶子さんか
らだった。今、全身にZ賞をみなぎらせ
てとまどっています。この荣誉ある賞が
自分の器にふさわしいだろうか……。
おもえば、第四回Z賞応募作品に始まり
四度目の挑戦、佳作、秀逸、準賞、そし
て今回、栄ある大賞と、一步一步大きな
目標に向って階段を登って来たような気
がします。本来、賞には一切縁がなく、

又、意識もせず、自分の一番いい位置を
得てトボトボと歩いて来ました。川柳を
忘れたカナリヤになりつつあった私が執
拗にZ賞に拘わり、一年の集大成として
自分の意とする選者に目を向け、一月は
私の「Z」の季節だった。受賞の楯を手
に「これが欲しかった。欲しかった。」
と呪文のようにつぶやき乍ら、これから
も我が内なる青い炎を燃し吐き続け乍ら
自分への戒めとして行きます。
水、急なるも、月を流さざる。この戒め
の、この喜びの心ここに止めて、流れの
水に足を踏みしめ、今日の一步、明日へ
の一步といたします。
ありがとうございました。本当にありが
とございました。

略歴

「ふあうすと」「藍」を経る

昭和四五年 句集『髪』刊行

昭和六一年第四回Z賞より応募

昭和六二年「点鐘」参加 現在に至る

佳作 四日市市樋口 仁

焦げついた鍋よ祭は逝ったのだ
父の中の鬼が見ている観覧車
息を殺して表札の木を探している
夕暮れの中を旅している鈍器
愛に夢中で珈琲が死んでいる
葉が一枚挟んである神の領域
日に三度きちんと妻の目を食べる
夜に干す作業衣海はもう眠い
ヒマワリが一匹父を追ってくる

佳作 神戸市 久保田美椰

逢いにゆく宵はいつでも雨になる
その前に関所を一つ通らねば
愛濡つる されど問いたいことがある
約束をさせて悲しくなってくる
窺見の中で他人になってゆく
さみしくてならない右手振っている
何事もなかった夜の爪を切る
壮年の君が淋しいことを言っ
深酒を吐ってくれる雨の音

佳作 津市須場 秋寿

金利は雪色人のころも澄んでゆく
虹を追うずうつとずうつと更に階段
十指みな神に与えて仏といふ
雪をみすぎて男は雪になってゆく
握り拳に仏壇がある雪の色
こないもこないもしょうのない冬のポケット
やいのやいのと過ぎていったのは隣
こころのなかに柩は作っておくことだ
浮き沈み激しき野辺の乱に死ぬ

佳作 山梨県 市川 孝子

このひらで哀しい音になる私
頸椎骨化いよいよ深くなる冬
このままで死にたくはない水中花
雨しごと 紫陽花いくど命乞い
透明な咳のひとつにおびえけり
雪簾々あね待つ宵の薄明り
情性とや花野に香く菟さむ
風に逢い それからずつとひとりぼち
夢まろい落ちる長さが測れない

佳作 黒石市 岩崎真里子

万物の中に埋れて子を産みし
ねんころろ 柿の実 栗の実 母の胸
しあわせの瞬間 母の眼の中にいる
みなやさし たれもわたしをこわさない
まっすぐな眼をトを見る 下を見る
悲しみは明日かも知れぬ 色あそび
細胞のひとつひとつを目に替える
花はバラ 罪は赤にと言ひ伝え
仕合わせの価値を問うてる悪魔達

佳作 岡山市 西条 真紀

数珠切れてばらばらこぼる計よ来るな
寒い七月 八月九月梵字をなぞる
訃報以後空耳ばかり声溜めて
燃え尽きた蠟燭見つむ声を殺し
曼陀羅にいくたび問わむ終のこと
季から季へ寒いねむりよ浅眠り
声を殺して経読む未明より未明
白い遺書人の口から口へ訃が
ほとけの蒲団に眠るほとけの子守唄

新らしいマンネリズムを避けよう

柴田 午朗

第一次選考でふるい落され、私の所へまわ
って来た応募句は八十二名であった。しかし
この作品はみな年期のはいった人ばかりだか
ら、これを五名に絞れといわれても、私にと
ってはまさに難事であった。

江戸時代からの伝統を背負って来たはずの
川柳が、いつの間にか少しづつその伝統の殻
を捨て、作者の詩精神を加味しつつ現代川
柳を盛りたてて来たことは見逃せない事実だ
が、しかし現代川柳に対する認識は、文学な
どというものとはおおよそ縁遠いものである。
私個人としては、古川柳の伝統は捨てたく
ない。作者の詩精神も大切にしたい。などと
欲しかったことを考えるのだが、結論として
自由詩の一分野としてエピグラム(警句)
的な存在となることを意図すべきかもしれぬ
と思う。「かもしか」の作品は、この意図に
沿つものと考えるが、まだまだ多難という気
持と、何かたのしいものを期待する気持とが

錯綜している。

川柳作句にもっと個性を出せといわれるが、
これがなかなかむづかしい。自己を表現せよ
といわれるから、八十歳を超えた私としては、
年よりの句を作ること、過疎になつたふるさ
とを詠うこと、これさえあれば言うことなし
と考えているが、柳友達はさっぱり評価して
くれない。むしろ「年よりらしくない年より
に」などと言うと、その方が認められたりす
る。

。年よりの日の年よりになりきれぬ 午朗
こんな句を作ったら、誰かほめてくれた人
もある。

この度私が推せんした作者の内に、金山英
子氏と佐藤岳俊氏がある。個性といえは、こ
の二人の作品はとてはつきりしている。こ
とに岳俊氏の作品には、少し強すぎるという
感じさえ抱いたのだが、どちらかといえは応
募句全体に、何か同じような傾向の見えるの

は何故であろう。

せっかく川柳のマンネリズムを破ってこ
まで来た現代川柳が、ふたたび新しいマン
ネリズムに陥ってはならぬ。この度の作品を
次から次へと読んでゆくと、みんな同じい作
者のものだというような錯覚さえおこって
くる。これはどうしたことであろう。

文学には「抵抗の文学」という言葉がある
が、川柳が考えているのは、みな一種の抵抗
に違いない。われわれはもつとこのレジスタ
ンスの精神を強調すべきである。この反逆の
精神こそ川柳の精神だといってよい。

世の中はいよいよ豊かに、世相はますます
複雑になって来た。この機会こそ川柳の好材
料。今が最も川柳家の元氣を出すべき時かも
しれない。

- 第一席 杉野 草兵 推 薦
- 第二席 行本 みなみ (岡 山)
- 第三席 小玉 カヨ (網 走)
- 第四席 勝野 みちお (大 町)
- 第五席 佐藤 富久子 (鶴 岡)
- 外山 あきら (大牟田)

巽かもしれぬ

時実新子

えるものを残し得るのだと私は考える。

一席

樋口由紀子 (姫路)

口中に溶けない飴を持っている

春雷や鏡の位置を確かめる

蒼天の果てまで生臭い前歯

目のなかでだんだん高くなる積木

水に輝き水になろうとする蛍

鬼ごっこ 水は両手で攪むもの

二席

大友 逸星 (仙台)

一般参賀の列の集金人である

仲間にははぐれたことにしておこう

天才を水に流したかも知れぬ

甲う人は弔い終えて椅子一つ

五百羅漢数えて五百一になる

独り酒人質ひとり解き放す

三席

石部 明 (岡山)

いちにちじゅう口動かしている影だ

物陰に父がしゃがんでいる月夜

田柱にかくれてわが名咬けり

うつくしくなるまで鎌を研いでいる

戦いの意志なき鳥をぶらさげる

声あげて月夜の杭を打っている

四席

芳賀 弥市 (仙台)

女と男軽い食事を繰り返す

私を何処かへ忘れたようだ鉛筆よ

人の痛みがわかるハモニカ吹いている

のど飴を妻から二つ女へ一つ

逃げ水に騙され父の野辺送り

五席

岩崎眞里子 (黒石)

みなやさし たれもわたしをこわさない

句罫をまいて寒さが増してくる

惨敗の掌にどんぐりを握りしめ

さよならのまぶた下から閉じていく

花が咲く あるいは人を越えて咲く

予選通過したZ賞作品を全部拝見した。多士済々の作家たちの真剣な作品群であるだけに、相当以上の疲労感で頭の中が綿のようになってしまった。

順位決定は約十五名の作家の作品を組み立てては崩し、崩しては組み立てる難作業であったが、選出基準をより個性的なものに絞ろうと決めて、次のように選出をした。

第一席 佐藤 岳俊作品 (岩手)

やがて確かな円墳となる乳房ふたつ

実らない靱からからと助鳴る

水神の井戸をのぞけば歪む顔

岳俊は器用な作家ではない。いつも同じ姿勢でぶつぶつ呟やきながら土と対している。鈍重なまでの彼のそのひとりごとが、あたたかい気がしてならなかった。

第二席 石部 明作品 (岡山)

わが影をばきばきと折り火にくべる

ひとりぼっちの闘かい

寺尾俊平

てのひらに生あたたかきものが触れ
うつしくなるまで鎌を研いでいる

省略された線画をおもわしめる作品が明の
特徴である。確かなデッサンに相当の進歩

がうかがえるが、内容の展開が今一步である。

第三席 山本忠次郎作品 (東京)

縄で括られるがっている昭和

考え過ぎの枯木がポキンと折れ

提灯行列みんなだまってついでいく

川柳の持つ弾力のある思考が溢れているよ
うな気にさせる忠次郎の作品はうれしい。こ
れでも少し図太さがあれば抜群なのだが。

第四席 長町 一咲作品 (岡山)

鶴も母も老いゆく構形して

業深し千蛇万蛇の中を往く

寄せ墓の温もりいたる地帯かな

感情のおもむくまま自分のおもいを絶叫す

るばかりの一吠である。純情一徹な彼の優し
いところは胸をつっぱかりである。

とにかくうまい作家である。日常生活の中
の起伏を極めて冷静に描写をしようとしてい
る姿勢を評価したい。

以下、野沢省悟、阿野文雄、藤井比呂夢、

行本みなみ、普川素床、西条貞紀、金山英子

情野千里、村井見也子、坂東弘子らの諸君が

それぞれの美しさを漂よわせて私を悩ませた

わけである。

選をしているある日の散歩の途中、桜吹雪
の広場でひとりゲートボールをしている頑固
そうな老人をみた。赤と白のボールをいっし
んに打っているのである。ひとり芝居をし
てる」と思う私の眼の前でひたすらスティッ
クを振っている。八十二人の作品をああでも
ない、こうでもないひとりで気ははっている
私と同じだと辛気笑しながら眺めていた。

選とは孤独なひとりの闘かいであると桜枝
りぢりの中で思っていた私であった。

若さ 礼 賛

橘 高 薫 風

かもしか川柳社のZ賞も設立からはや七回を迎える。Z賞へ応募をする作家(してきた作家)の主力は温健的革新派だったから、回を重ねて受賞者が逐次応募者の中から消えて行くと、応募者の増加に反して、作品の質量感が薄れて行くように思えてきた。それは、私が応募者の既成の名にこだわっているわけではないし、作品の重量感が必ずしも文芸的に秀れているとも思わないのだが、川柳界も斬時、短歌の俵万智的作品の趨勢に向かっていくように思えてならない。Z賞に見る限り

見えていますよあなたが好きになる人を
忘れたし卵かきませたら黄色

若い世代への移り変りと女性の進出が、上ずべりでない内容をともなつて溜々と押し寄せ

Z賞は、只今の作品を厳しく見据えた賞で
将来的展望をこめたものであつてはならない。

将来、川柳界にも女性の見事な作家群像が輩

そのように殊更私が言及するほど、かづき
作品は一見淡彩である。然し、この淡彩は、

出するのではなかるつかと、平安時代の和歌

作者の稀に見る秀れた個性を生かした根源的
表白の結実で、誰よりも現代風であった。

に於ける絢爛とした十二単衣姿の女人像と、

欲しいものなんにもないという返事
忘れませず片手で卵割るよう

ダブらせて夢見るのである。

欲し、当然のことを詠んでユーモアの味を
それに、あそび心のあるところがいい。

第一席 高橋かづき (西 宮)

第二席 坂東乃理子 (加古川)

返事欲しすつと後悔するよう

人を待つ姿はどこか鳥に似る
捕えると鳥もたちまち汚れゆく

どつと押し寄せてきた顔、顔、顔、思いつ

材もいよいよ自在という感じである。

めた顔からあつげらんとした顔まで、さま

△第二席 村井見也子作品 (京 都)

ざまな顔と対い合うこと一週間。サバイバル

・えんぴつを削る祈りがいつもある

ゲームのような緊張感の中での選であった。

・妻の名にあえてこだわる芒の穂

一次選を通過してただけあつて、皆それ

・父系母系のなを見たくて指めがね

相応の技術の持ち主。だが、句会作家や題詠

柔らかな氣息の聞える神経の行き届いた作

作家によく見受けられる小主だけの巧さの

風は、昨年にひきつづいて健在である。日常

人もちらほら。巧さは、あくまでも自分の思

か之余裕が残されている。その精神的余裕が

念を生かすものであつてほしい。また、それ

あるからこそ、自らの身辺に静かな詩的空間

だけのポリシーは要求されて然るべきだ。

を用意できるのであつ。

△第一席 石部 明作品 (岡 山)

△第三席 野沢省悟作品 (青 森)

・真暗に生家が口をあけて待つ

・からのちゃんに春雨みちてゆくをまつ

・晩年の股間に蝶を眠らせる

・どこをかじると微笑ってくれるゆでたまご

・声あげて月夜の杭を打っている

・うなじは魚ふいに泳いで行ってしまつ

卓越した技巧の牙えを見た。そればかりで

昨年「わが」の多用が、今年に接続助詞

なく、内実には虚無的な贅りを帯びた男のペ

「て」の多用が目立った。「て」は句の緊ま

ーンスが睨と在って、作品の価値観は早めら

りを緩くするので、今ひとつ厳しさを迫力に

れている。持ち前の才を沈潜させて、詩趣を

欠けるが、作者の軟かな心情と調和している

生かした作も見られるようになり、発想も素

第三席 平 宗星 (東 京)

冬の蝶国境越えて人となる

この作者には、批判の精神も感性もユーモ

星型に蝶の翅切る日曜日

アもあるのだが、句の自身への引きつけ方が

曖昧なのと、色彩にこだわり過ぎる難がある。

感が薄れて行くように思えてきた。それは、

第四席 井上 信子 (京 都)

私が応募者の既成の名にこだわっているわけ

枯れたくない枯れたくないと水をのむ

ではないし、作品の重量感が必ずしも文芸的

祭囃子だれかさがしているように

に秀れているとも思わないのだが、川柳界も

さて鬼の首を取ってはみたものの

斬時、短歌の俵万智的作品の趨勢に向かっ

作者は、私が今回選考推薦した作者の中で

ているように思えてならない。Z賞に見る限り

は最年長者で、他の四氏は三十代と四十歳を

若い世代への移り変りと女性の進出が、上ず

少し出た若い人たちであった。近頃、「たか

べりでない内容をともなつて溜々と押し寄せ

が川柳、されど川柳」という言葉がもてはや

将来、川柳界にも女性の見事な作家群像が輩

されているが、これは私の好まぬところで、

出するのではなかるつかと、平安時代の和歌

「鬼の首を取ったところで」に通じる劣等感

に於ける絢爛とした十二単衣姿の女人像と、

たかがなどと思わず楽しんでおられる。

第一席 高橋かづき (西 宮)

第五席 久保田美椰 (神 戸)

返事欲しすつと後悔するよう

頬杖をつけばかすかに死の匂い

どつと押し寄せてきた顔、顔、顔、思いつ

諦めてしまえばただのあすなろつ

めた顔からあつげらんとした顔まで、さま

来世はあなたの母になるつもり

ざまな顔と対い合うこと一週間。サバイバル

この作者、句の陰翳を理解出来る人だ。

ゲームのような緊張感の中での選であった。

△第四席 金山英子作品 (神 戸)

一次選を通過してただけあつて、皆それ

・霜柱サクリと我が子 私の子

相応の技術の持ち主。だが、句会作家や題詠

・父の忌の風は朝夕夢見のはずれ

作家によく見受けられる小主だけの巧さの

清冽な痛みを書く作者である。自らの身心

人もちらほら。巧さは、あくまでも自分の思

から発するかなしみを作句の根幹としている

念を生かすものであつてほしい。また、それ

だけに、句は苦なりの重圧を克服しながらの

だけのポリシーは要求されて然るべきだ。

創作といえる。自己の生やわが子の生を視つ

△第一席 石部 明作品 (岡 山)

める眼差しは必死だ。必死だけに美しい。

・真暗に生家が口をあけて待つ

△第五席 外山あきら作品 (大 牟 田)

・晩年の股間に蝶を眠らせる

・妻癒えるなら逆立ちのなんどでも

・声あげて月夜の杭を打っている

・ホイサッササ極を運ぶのは他人

卓越した技巧の牙えを見た。そればかりで

日々の生活の中に、句材を貪欲に求め、人

なく、内実には虚無的な贅りを帯びた男のペ

ている。生き残るといふことの実感が籠めら

れている。持ち前の才を沈潜させて、詩趣を

れた諸作からは、感情の昂ぶりや心境の衰え

生かした作も見られるようになり、発想も素

が看取され、胸が熱くなるのを覚えた。

吉田浪、阿野文雄、井上信子、西条真紀、斎

藤はる香、樋口仁、本多洋子、三浦蓉、長町

一咲、加藤久子の諸氏の作品も印象に残った。

自分にとって川柳とは何か

大野風柳

とにかく八十二名、二千四百余の作品群に
辟易したというのが本音である。

一次審査の方々も苦しみ抜いて結局は八十
二名を通過せざるを得なかったであろう。

そして、いかに三十句を揃えることが困難
なことであるかを痛感した。二十句では作家
の川柳観や思想を打ち出すには弱いと思える
し、五十句では審査のことも考えて期間的に
無理と思う。したがって三十句がギリギリの
ところだと思いつつ審査に当たった。

なんとしても、自分にとって川柳って何だ
ろう、これが三十句を貰いていなければなら
ないということである。

全作品を通してZ賞を意識してか、自己表
現よりも作品表現に傾いた作家が多く、また
息が続かず後半尻つぼみになってしまった傾
向も見つけられた。

極端に言うならば、前の二十句だけで審査

した場合、異なった結果になったと思う。審
査員も人間である。作品の並べ方も考える必
要があるとも思った。

リズムを壊すことが新しい川柳とか、妙に
感傷に落ちこんでみたり、意図的に暗さを求
めたりした作品も多かった。

審査のひとつの基準としてリズム感を入れ
た。そして喜・怒・哀・楽の中のひとつに焦
点を絞り、自分がそこに存在しているかどう
かを重視した。

結果として五名に絞った。前記の条件を備
えていた作品群であったからである。
惜しく入選できなかった浜本美茶・樋口仁
・行本みなみ・樋口由紀子・原多佳子氏らに
も拍手を贈りたい。

三十句の力とは別に次の作品に共感を得た
ので列記して祝福したい。

五つの熱い火には……

福島真澄

第1位に推せんした、金山英子作品の塚口
応募作30句から、句のいのち達が、いっせいに
訴える力になって、こちらに全身でぶつか
って来て、私の胸を揺さぶるのである。

第1次選を通過した、80余名の応募作のな
かで、一つの想いに貫かれ、しかも鑑賞に耐
え得る30句を応募作としたのは、特例を除い
て、英子作品のみであった。

子と哭いた速い炎天 いまも炎天
七ツ参りの子もうたかたや百の灯
のどのあたりのさくらつめたし母の紅

官能の美と死は背中合わせである。のど
のあたりのさくらつめたし」と、英子さんは
書く作家になった。情念を抛り処に、境涯を
逆に、テーマとして、選び直した英子さんの
才華が眩しい。泪で書いた30句だとしても。
第2位に推せんした、加藤久子さんの句と

お名前は、杜人誌の投句欄でお見掛けしてい
るので、まったくの未知の方ではないが、そ
の他での活動を、裏聞にして存じ上げないの
だが、久子作品には、かつての革新誌・川柳
ジャーナルの、最も高揚したその中期頃の詩
精神が、受け継がれている気がしてならない。

枯野来るわたしの蒼い郵便夫
百田ライター錆びた港がぼつと点く
夕陽の椅子の軋んで沼に流れつく

孤独な魂が点す一本の蝋燭の灯は、憧れや
ファンタジーを揺らしながら見せてくれるが、
風を聴く孤影をも揺らす。このような一場面
を、久子作品から見ると、改めて、こころとか
想いを書かなくても、書かないではいられない
感情から、句作品は発想されてゆく。久子
作品は、そのことを憶い出させてくれた。
第3位は、野沢省悟作品を推せんした。

ふいに遇つ下半身の草いきれ 浜本 美茶
ハンガーが筋肉質になってくる 樋口 仁
誰の手もかりずに重い雨が降る 行本みなみ
鉄棒でくるくる回ってからひとり樋口由紀子
草食の馬を噛っていませんか 原 多佳子
修司来たまえ天神甘栗ふたつある 野沢省悟
オモチャ箱コトトリと秋を裏返す 松本 春道
平成のぼかんとする昼の月 山本忠次郎
号令がかかると並ぶチリップ 佐藤 幸子
病室にばつんと落ちてくる眼玉 石部 明
なにほどの雪やおずおず抱かれおり金山英子
おんな結びやんわり傷に触れてくる野田はつ
句詠点で笑えるようにしておこう 石田寿子
朝顔も数える刻もひとりです 上高みゑ子
切株の濡れている間は裏切れぬ 村井見也子
てにをはの判る金魚を飼っている 本多洋子
花の芽を摘んだ指なり流刑なり 吉田 浪
花壇では戸籍調べをせぬように 奥山 晴生
大根おろしが辛い仇討ちかも知れぬ 外山
枕が二つ世界が二つ喜劇とも 井床 芦蘭
カレンダー年々歳々手品師の棲む藤井比呂夢
みんな呆けてカボチャに腰をかけている菊地
脇腹をくすぐりあってバスを待つ 普川素床
無料バス漫画の本を買いにゆく 井上 信子

ワイングラスちちとないて落下のとちゅう
うなじは魚ふつと泳いで行ってしまっ
あいだくむねびれにまい雪のやみ

その喪失感と共に、感覚的に純粋な官能を
書ける男性作家は、いま川柳のなかで、省悟
さんの他には私は知らない。3位推せんは、
それが評価なのではなく、応募作30句には、
89' かもしか賞の受賞作が含まれている、そ
こに私は拘泥する。省悟さんには殊に、新し
いモチーフで、新作を引っ提げての参加が望
ましかったが。

第4位を長町一吠さん、第5位を西条真紀
さんに推せんした。お二人が個々に書かれた
相聞は、今まで川柳文学では書かれないで来
たのではないか。心をこめて見守りたい。

母を呼べん 深夜の襖を開け放てり 一吠
夢から夢へ病妻しばらくは騙されよ 一吠
七月十九日以後の干潟である 一吠
ほとけの蒲団に眠るほとけの子守唄 真紀
わたしの泪は夫の泪鳥啼く 真紀
睡たかり夢のすこしを見残して 真紀

ある選後感

片柳哲郎

Z賞は芥川賞の選考のように一次予選で厳選し、最終審査は合議制でやるべきだと夢のような理想を僕は以前から持っている。応募作品はみな真剣で恐ろしいばかりである。与えられた二千四百句を読みながら、現代川柳の愛好家は他人の作品を鑑賞することによって、時間と神経を消費しながら酔いたいのだ、純粹な感動が欲しいのだ、そして追い込まれたいのだと思った。

現代川柳が展かれる場所は、主観とイマジネーションの合成である。従って文法的におかしくても、モーディとして面白ければ良いとさえ思う時もある。短詩型文芸の生命の燃焼はそういうものだと思っている。しかし何故川柳作家は「罪」「罨」「処刑」「斧」というような言葉に左右されるのだろうか。選ばぬかれた言葉というものは至宝のようなもので、輝きわたる筈のものであるのに。

え返る。遠い哀愁は女性作家の極みにあるもので、その極みの中に遊ぶこの一連は独創的でしかも汚れがなく、粗大な構図を愛さぬ成果が、他の作家の試ることさえなかった深淵をとらえていた。

石部 明は練磨を以って勝る人という印象をこの作品で受けた。二、三削って欲しい句があったが、これは総べての応募作品に言えることで30句は連続でない限り疵があるからこと生きるのかも知れない。この人の作品はどのように深刻な内在でも明るく映る。幸せなのは鑑賞者の方である。求訴力のある一連であった。

野沢省悟は力作を発表した。この作家は一連の作品の中でよく破断を起すので、酔いが覚めてしまふのであるが、今回は致命傷に至らなかった。美しく情愛の淡彩画は流れて水底に沈む。ある一步の力感を更にと僕は望むものである。

加藤久子の作品には爽快な流れがあり、ロマンチズムの香りがあふれる。作家の思いとは違うが一句ごとに無理ではない意外性が花咲いていて成功させている。川柳界の常套技法を脱した興味ある作品であった。

市川孝子は未知の才を秘めた孤独な作家だと思ふ。過剰な表現技法も知らぬように淡々と思いを表出しているが、生れては消える心の葛藤の、その消えてゆく姿を適格にとらえていて心に残った。

長町一吠(岡山)・佐藤幸子(札幌)・阿野文雄(宮崎)・岩崎真里子(黒石)・西条真紀(岡山)の作品は同時に奨めたい作品であったし、高い品位を備えていた。また久保田美柳(神戸)の作品は軽快で、新しい庶民川柳を湧起させる面白い一連であったが、これは短詩型作家の想いの充実ではなく、ストーリーの比重が大となって通り過ぎた。惜しいと思つた。斎藤はる香(小樽)の作品もつまじいと思つた。詩の純粹衝動を更に期待したい。いずれにせよZ賞応募作品の隙のない肉迫に大変な疲労感を覚えたことも告白しておきたいと思つた。

加藤久子さんを推す

尾藤三柳

第一次選考を経た作品が82点ということはあるが、参加総数がかなりのものだったろうことを推察させる。願わくば、第二次選考に当たって参加総数〇点、第一次通過作品〇点という内容がわかれば何ほどの参考になると思うが、いずれにせよ、年度を追って参加者が増加するということは、本賞の重みが確実に増しているということ、喜ばしいことではある。

感性の面からにせよ、情念の面からにせよ、思想の面からにせよ、宗教の面からにせよ、それぞれの方位から、自己を含む人間の実存に迫ろうとするのが現代の川柳だと思つた、それを最初に理論づけた田中五呂八はやはりえらいと思う。川上三太郎でも岸本水府でも中島紫痴郎でも森井荷十でも、明治末年の新興作家(みんな二十代の青年)たちは、それを肌で感じ、頭で求めながら、確かな理論にまでは体系化できなかつた。

のが川柳だと喝破した五呂八は、このとき二十八歳、明治の新傾向を先導した青年作家たちと同年齢だった。明治の二十代、大正の二十代、そして顧て昭和の二十代を惟つと、感なきを得ないが、作品内容という面に限れば、あきらかに進歩している。

第一席に推した加藤久子さんのよさは、イメージにステレオタイプがないこと。上位になるほどの作家は、それぞれの言語処理能力を持つているが、彼女の場合は、皮膚の外側の客観的事実と、皮膚の内側のコトバという全く別の様式とはたらきを持つ両者を的確に統御する天性(多分)を、この一兩年はつきりと顕わしてきたことで、上質の作品は一篇の象徴詩として鑑賞に耐える内容を支えている。提出作品にも粗粒がなかつた。

いつもの角で言葉まみれの太郎の靴
次女横向きちりちり通る寒冷前線
冬の田圃通れて覗く塚の底

第二席の樋口由紀子さんは、少しばかり情念へのもたれと、形象化の甘さが見られるが、行間にキラキラとした資質をのぞかせせる。

蒼天の果てまで生臭い前歯

干したままのハンカチがある私の胃

第三席の本多洋子さんには一種のロマンチズムが感じられ、いたずらに感傷の磁力に引きずられない句柄に好感が持てた。

コーヒーをどろぞろ 五月のデスマスク

こんなにやく屋の親父とゴッホの話する

第四席の情野千里さんには、テクニクに倚りかかり過ぎた鯁舌の傾向と作意が目立つが、総体として訴えるべきを訴えている。

葡萄酒は酔になるジゴロ的凝視

フライパンの上で毛糸をもつれさす

第五席の太友逸星氏は、さすがに骨格のしっかりとした作品を揃えているが、ベテランとしてこの水準はむしろ当然であろう。

蠅が一匹飛んでる 二匹いる

放火犯人と朝飯を食っている

なお、萩原久美子、宗村政己、芳賀弥市、樋口仁、菊地俊太郎、原多佳子、三浦養、斎藤はる香、都築裕孝の各氏も、個性を感じさせる好作品を見せてくれた。

第一次選考・通過作品五句抄

・佳作以上は除きます。
・三十句中より五句抄出しました。

福岡県 国武 ナカ子

亡母恋いの駅は他人の顔ばかり

人間の哀れ虚飾の沼を這い

虹の橋渡る児の夢こわすまい

橋いくつ渡ると抜ける泥の海

あの橋の向うは戻れない故郷

郡山市 山田 昇

変身願望はらはら秋が深くなる

半熟の卵に負けた軽い飢え

刺のある木の本性を見あやまる

人の噂と流されたのは花の首

醜態を見たのはきつと昼の月

兵庫県 一ツ家 智恵子

血を吐いて罵り詰る不如帰

夏の夜の蛍のごとき忍ぶ恋

困り裏端弾け散ったる明日の夢

迷い込み腕く涙の恋の淵

鷗舞う秋の夕暮ひとりきり

北海道 宗村 政己

鉛筆が平気で恐いことを書く

そして裏切り 消しゴムのかす飛ばす

ショーウィンドー首吊りの紐を置く

これは傘 これは人間 ぬれている

抜きんでる芸芸もなければ堅い椅子

大宮市 松村 育子

私だけの沼地で探す金の斧

生き死にや千の思いに千の悔い

時を止め酔生夢死と参ろうか

不定愁訴キリキリ寒の水つまし

身の鬼は寝かせて覗く万華鏡

新潟市 藤井 比呂夢

夢をひろいに行く顔見知りの鬼よ

米の値に鬼のなみだがわらえない

中流になれぬ花のこころを裏切らぬ

考えすぎの性慾だとはおもわざり

性慾は瘦せた椅子かな唾の空

芦屋市 井床 芦蘭

枕が二つ世界が二つ喜劇とも

首のない男にんげんらしくなる

挫折した君を迎えるチンドン屋

肩書のとれた帽子が風に飛ぶ

哀しいことに脳死の髪が伸びて来る

市川市 普川 素床

きむひょんひ裏も表も月が照る

脇腹をくすぐりあってバスを待つ

鐘の声みんな背中をどつしたの

頭をあちこちにつつけコピー濃くなる

笑い方教室案には殺さない

東京都 荻原 久美子

父泳ぐ 夢の向こうの帽子掛け

たとえば粥の白さに積もる情話など

囁きのソファに昔むかしの陽が沈む

制服制帽 みんなやさしい水たまり

追憶を遠く眺めてぶわぶわと喪服

金沢市 越川 智慧

鬼は外花の毛布を引き寄せる

梅匂う夜は大人のチャチャチャ

三月の風はせつかち剽盜記

透明な恋でラムネの味がする

雪が止む喉の腫れを問うてない

大牟田市 岩田 土筆

新人類母を背負うてみたりせぬ

均等法妻の時計が狂いだす

とても哀しい軍歌が一つ唄えない

銭が無くなるもたあれも居なくなる

焼酎がうまくて遺書がまた書けぬ

海老名市 高橋 佐知子

あさがおのつるが私へ伸びてくる

不倫発覚あじさいが揺れている

病気のだからやさしくしてほしい

手紙なら抱いてと書ける大胆さ

この病いメロン食べたら治りそう

大宮市 野本 君子

冬銀河遙かな視野の果て踊る

美しい白蚊に迫る男娼窟

深海魚銀キラキラと舞踏会

レットルを貼るとメロンが売残る

連獅子の童子に祈る児の病

東京都 菊池 俊太郎

フラッシュをたかれた末のぶっかき氷

鎖がとかれたさみしさ四方によろけ

昨日の地震をなつかしむ曲った煙草

しめくくりのドラムをきちゃっつと叩く

どんぶりに顔をつつ込む昭和残党

柏原市 鍋島 十歩

布を晒す冬のさなかの追想で

都慕情の弦をいっぽん抱いている

さくら満開わたしも狂いたくなった

小面よ愛は求めるものなのか

しずかな夫婦いくつの峰を越えてきた

春日部市 片島 康子

母がいる女関だから軽く開き

来世もきつと女で渡る橋

和を保つ原点にいる母の笑み

タコ焼の温みが消えぬ間の家路

洗った手女はちよつと髪をなで

高槻市 河瀬 芳子

何て哀しいジョークが詰まる玉手箱

自分史の何処を繰っても火の匂い

茶碗割る わたしは許してはいない

牛傷を晒しておと達の椅子

雑魚の群れに油断のならぬ目があるぞ

静岡市 原 多佳子

狂ったメジャーではじまる女のいくさ

歯車の顔をつらねて 負の系譜

うす目の猫 津波警報かも知れぬ

ばら散って 干潟の舟が動かない

密室著 卵が後を追ってくる

京都市 奥山 晴生

君が代を唄うのっぺらぼうである

学ぶことがこんなに多いお葬式

或渴き影から先に水を飲む

偏差値にゼンマイ猿は作られる

下請の拳は忠臣蔵が好き

大船渡市 富谷 英雄

主役にはなれない罪が多過ぎる

影踏み影が薄れてゆく都会

情報の海で溺れてばかりいる

パッサリと斬った世相に背かれる

決断の時はひとりにして欲しい

岡山市 吉田 浪

ポシュットにたまる初冬の裏ばなし

耳底にかそけき餅 いまもある

おんなは風ときりきり舞いをして

花よりも花であらうと葉鶏頭

こおるぎよ おどろの髪を何んとして

島田市 土屋 桜子

雪ひとひら誰もとまらぬこの指に

ガラス戸をすり抜け蝶に帰る午後

非常ベル 日記に今日も晴れと書く

花みずき恋とはいえぬ恋がある

便箋をうずめつくしている桜

北海道 桐越 千絵

何処かでピアノ耳研ぎ澄ますめし茶碗

風みどり白い牡丹は母になる

バスついで生きる証しの塩買いに

地下街をゆっくり抜けるノド仏

北歩くドンキホーテに陽は昇る

熊本市 松田 京美

恋に恋して炎生んでゆく
もえあがるわたしがこわくなってくる
雪しんしん恋をかくして恋をする
この電話あなたと思ひ走りとする
四十をいくつも過ぎてからのこと

花元おとこの知らぬ手術台
流藻のなんのふしぎもないように
風媒花ゆるしあうよりはかはなし
たたずんで暮れる波ガラス
追いつめてお化けかみ前の前へ出る

約束が割り切れなくて雨になる
大安に乗ってしまった紙ヒコーク
本屋まで人さし指もついでゆく
失語症昔の夢を塩漬けに
柔かい手だね哀しみ攪むなよ

高浜市 加藤 正治

辻地蔵と春を大きく吸っている
枕のなかに恋のはなしの薄明り
老残はいやだいやだと猫柳
膝の猫やさしくすると便り来る
神さまにランクがあったのだ妻よ

京都市 上島 みる子

宮城県 都築 裕孝

むかしむかし柱時計は野にあった
父がいつもこぼして歩く鍛冶屋の火
海涸れて小学唱歌復刻す
体力が落ちてパチンコ玉の玉
靴を履き雲と変死をするつもり

小樽市 斎藤 はる香

埋めたる運河のはなし男女のはなし
夕焼けの火は風を呼ぶガラス館
あなただけ照らすランプはこの高さ
姑もわたしも井戸を濁して枯れてゆく
おもいあまた罪を沈めてる運河

宮崎市 本田 南柳

わたくしのために天使が手を汚す
花の種ほしがる飢えている如く
特効薬に毒がない筈はない
とても痛いところを突いてくる鏡
木の橋を時どき渡る神がいる

奈良市 玉利 三重子

矢印を歩く首輪のない犬と
投げられた言葉を一つずつ拾う
鳩尾に釘を打たれたまま歩く
足元にほどよい石が落ちてくる
人斬った指でいちこの朱をつまむ

明石市 山本 ひさる

人間のころろ尋ねる逆廻転
樹のどこを彫っても亡父になる修羅よ
援軍の無かった亡父の骨ひろう
地下足袋の亡父に整教論がある
じつくりと致死量を盛る白い皿

美祿市 安平次 弘道

北前船港は過去にしがみつ
君子豹変すぐ自画像を塗りかえる
性善説をいつも裏切るリトマス紙
人情に負けると割れる鬼の面
連鎖反応いつも怯えているドミノ

四日市市 石田 寿子

風からの返事待って火を焚こう
遠まわりすればわたしの背が見える
まち針を多い目に打つ春の街
さりげなく手を振るそう深くはなかったから
句詠点で笑えるようにしておこう

仙台市 庄子 喜一

陽のめぐみ苦手な植物だってある
シルバースhirt小さな火種持ってます
還暦の妻の軀を聞いている
泥舟を漕ぎ出す男の意地がある
家計簿の中で夫は軽くなる

札幌市 佐藤 幸子

あまりにも静かな暮し 心太
じりじりと押され出口か入口か
地下走るうつろいやすき樹を抱いて
殿さまのような男と暮しおわり
号令がかかると並ぶチューリップ

仙台市 宮本 めぐみ

乱伐の森で情けの木が枯れる
軽い情けと流されて行く女下駄
満室の札あり精神科の五月
明日すこし歪む鏡の森にいる
帆船に出会ったのはたった一日

えびの市 阿野 文雄

いのちの旅の朝々にある洗面器
火の輪くぐり青い鱗が散乱す
虹杓か男は今日も手を汚す
苦悩する葦よ西日を真っ向に
目の裏の枯野が動こうともしない

弘前市 松山 我楽

新たななる闘志初日の彩を揉る
背伸びした時から増えた敵である
水子塚女の闇を深くする
喀血で華を描いて散ってゆく
明日からは米粒入りの粥と云う

福岡市 野田 はつ

喜劇の似合う帽子をいつもふとこころに
ヒューズ飛ばしたその後を男語らない
野心抱く男に遮断機が降りる
煮こごりや妻という名の古りしこと
泥まみれのドラマ演じて夫婦です

福岡県 牧野 孝子

春の擬音に耳をかさない葱坊主
少し腐った林檎で明日が面白い
木暗がり後に引けない視野にいる
極楽トンボの手紙何も書いてない
風の素姓にこだわり通す秋のブランコ

第七回Z賞は、全国各地から多数のご応募をいただきまして有難うございます。

受賞者は、西山茶花、桑野晶子両氏につづいて三人目、そして二年連続の女性受賞となり、川柳も女性時代への到来を思わせるものがあります。

次回は、第一次選なしの選考方式を取り入れてみることに致しました。出句者と選考委員の熱い闘いが予感されます。多数のご応募をお願い申し上げます。

第八回川柳Z賞・作品募集あんない

▽作品 自由吟30句を11組 未発表か平成元年の既発表作品に限りま。

▽選考委員

細川 不凍 ・ 大賞 一名十万円

大野 風柳 受賞作品を含む一

福島 真澄 五〇句を収録の大

片柳 哲郎 賞作家句集を「か

尾藤 三柳 もしか文庫一より

時実 新子 刊行。50部贈呈。

橋高 薫風 津軽漆特注楯贈呈

寺尾 俊平 ・ 準賞 一万円

森中 恵美子 ・ 秀逸 一千元

杉野 草兵 (図書券)

▽用紙 出句専用紙を事務局にお申込みください。(専用紙以外は拝辞します)

▽会費 不要。発表誌寄附金は千円同封

▽郵券代用は五百円2枚、千円1枚にて。

▽締切り 平成二年一月三十一日消印

▽送付先 039-152青森県下北郡川内町浦

町 高田寄生木方 川柳Z賞事務局

川柳Z賞選考委員会

甲府市 中村純江

風景が ひとつ動く時 悪女
記憶喪失 紅筆すこし重すぎる
髪をたく 別れ上手な女どき
奇形魚となりて私の海がない
無人駅の あなたの手に付てみる

山形市 黒沢 かつし

卑怯者と言われてからの綱渡り
皮膚一枚の恩義に長い旅をする
浅学非才が生真面目にピアノを叩いてる
わだつみの声が消えずに雲に乗る
一本の葉の恵みを疑わぬ

福島県 樋口青樹

鳥葬たなと言ったのは五月

遮断機が下りる 冬の蠅を掴む

鼻骨でも詰めましようか 誰

放蕩息子の頭がフライドチキンになった

フラミングゴが威嚇しているのは海

札幌市 加藤 かずこ

やさしさごっこに飽きた小指たち

訣れ上手サクランボのジョーク

シナリオを買いに行く喫茶店

フライパンから弾けた豆の不幸せ

カレー皿を駆け抜けた 少年の夏

福島県 松本春道

靴下の穴から闇へ遁走のバツハ
ゆるい蛇口ポトリポトリと人が死ぬ
オモチャ箱コトリと秋を裏返す
茄子の帯それは愛とも妥協とも
桑中に風を吊して耳を病む

大阪府 夏 礼子

ふるさとへ旅の重さは問わぬこと
過ぎてゆく春とどめんと阿修羅の掌
酔ったとて演歌の生き方は出来ず
たかが女 されど女の放浪記
抱擁のゆらりと椿水面に

旭川市 浜本美茶

ときいろに川生きて短き手紙

狂女たりさくくらぶきでどしゃ降りて

抱きしめるだんだん短くなる手足

しるじろと足おちている夜の椅子

唇つけや雪のはなびらゆきまぶた

香川県 板東弘子

輪廻転生華のうてなに狂わんか

風花やみんな他人の貌でゆく

耳鳴りへすとんと落ちる冬の蝶

私の中に黒々とある幹の傷

グラスの中で喜劇がキラキラと光る

ひとつひとつの足跡を追う

かもしか川柳文庫

⑦高田寄生木 句集 「砂時計」

⑪三五〇号記念句集「かもしかの眸」(3)

⑫高田 和子 句集 「手鏡」

⑬宮本めぐみ 句集 「花蓆」

⑭野坂美智子 句集 「彼岸花」

⑮岡田 稲人 句集 「歩巾」

⑯中村 富二 句集 「童話」

⑰杉野 草兵 句集 「C」

⑱柏葉みのる 句集 「鳥獣戯画」

——川柳Z賞作家シリーズ——

⑲細川 不凍 句集 「雪の褥」

⑳古谷 恭一 句集 「枕木」

㉑西 山茶花 句集 「瑠璃暮色」

㉒桑野 晶子 句集 「雪炎」

㉓金山 英子 句集 「幻華」近刊

・B6判 ・二頁三句 ・一五〇句

・頒価五〇〇円 ・送料一〇〇円

●杉野草兵柳句集「学生日記」四八〇円

●「かもしかの眸」第二集 一〇〇〇円

かもしか川柳文庫刊行会

—新幹事—

片 岸 てい一

バラ一輪黄砂が置いた呪詛に萎え

罅り合う五月の風に伸びる爪

飽食の奢り小蟹の窒息死

生臭き男の匂い藤の花

やどかりの殻を拾っておぼろ月

万華鏡ひとり覗けば白い海

手品師の夢が悶えている帽子

隠しようのない妬心盛るサクランボ

死神がときどき覗く蟹の穴

アカシアの柩を並べて月に哭く

人間、このいとしまもの

氷見市 片岸 てい一

青春時代を旅順・大連(中国東北地方)で過した私は、終戦を境にその地で修羅道をさま迷いました。引き揚げて退職するまで、矢張り修羅場をぐるり抜けて来た実感しています。

しかし、そうした中であって出会った様々の人を通して、人間の持つ強さやもろさ、素晴しさや温かさをも十分味わいかみしめて来たつもりです。

だからこそ、私にとって人間は、この上なく懐しくいとおしくてたまらないのです。私と川柳の出会いには五年前、まだほんの幼稚園児です。人間をうたう川柳を作りたい、こんな願いが「かもしか」との縁となり、高田先生から幹事推せんを戴ききっかけとなりました。本当に有難いことだと感謝をし、同時に皆さんについてゆけようかと一抹の不安も抱いております。今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。